九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

三百回を通過した中国文藝座談会 ： 五百回を目指して

竹村, 則行
九州大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/2202965

出版情報：中国文学論集. 47, pp.1-11, 2018-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

三百回を通過した中国文藝座談会

――五百回を目指して――

竹村則行

一　はじめに　三百回までのまとめ

筆者は、二〇一八年七月、第三百回中国文藝座談会の席上、静永代表から、機関研究会である中国文藝座談会が三百回に達したのを記念した小文を、同機関誌『中国文学論集』に寄せるようにとの依頼を受けた。実は筆者は、十六年前にも、川合康三当時日本中国学会出版委員会委員長から同様の依頼を受け、時に二百回に達した文藝座談会について小文を寄稿したことがある（末尾参考。本稿は内容上、前文と重複する部分がある）。

原則隔月開催で年六回開催する本会が二百回から三百回までに要した期間は十六年。よくぞコツコツと厭きもせずに地道な研究会を積み上げてきたものと、我が関する事ながら誇らしく思う。事情が許せば、当然、次の四百―五百回を目標に、並駕する『中国文学論集』（本号は四十七号）も堂々と百号を目指してもらいたい。

今回は、前小文で言及しなかった文芸座談会と『中国文芸座談会ノート』『中国文学論集』との関係についても重点的に取り上げたいと思う。前稿の時も疑問を感じていたが、今日、中国文学または中国関連学科を有する大学は全国に多数存在し、その大学それぞれに特色ある研究会や独自の学術誌を有する所も多い。その中で、特に文藝座談会について記念小文の依頼があったのは何故だろうか。今回、小文を弄して思ったことだが、ひょっとすると、会の名称の連続性に関係があるのではないか。つまり、九大の場合は、昭和二年（一九二七）の支那（中国）文学講座開設以来、四代の主任教授が継続して「中国文藝座談会」の名称を連続使用するが（『中国文学論集』は三代教授が連続使用）、他大学の場合、或いは主任教授主宰の研究会名、又は一代限りで改称を重ねてきたのではないか。

こう考えれば、名称の如何、回数の多少よりも、当然その内容如何の検討が優先されるべきである。

以下、前稿を参照しつつ、文藝座談会三百回までを再総括し、『中国文学論集』四十六号分を併せて検討する。

二　筆者の関わり

筆者は昭和四十四年（一九六九）に九州大学文学部に入学し、一年留年した二年半後に岡村主任教授の中国文学研究室に進学した。昭和四十二年（一九六七）に九州大学を定年退職され、早稲田大学に移られた目加田教授の九大での講席に侍る機会は残念ながら無かった。筆者と文藝座談会との関係はこの中文進学時に始まり、間に六年間の徳島大赴任を挟み、学生・院生・助手・講師（徳島大）・助教授・教授・名誉教授に至る、今日までの四十七年に及ぶ。この間、徳島時を除けば、約四十年間、特別な事情が無い限り、文藝座談会の座席を温めたことになる。俗に耳学問というが、筆者の乏しい中国学の知識は、多くが文藝座談会における諸兄姉や諸先生の研究発表、討論に拠ったものであり、その状態は現在も進行中である。このような次第であるので、筆者は目加田教授主宰の中国文学研究会については実情を知らず、研究会開催の実績等は九大文学部の紀要『文学研究』の彙報等によった。ただ『文藝座談会ノート』十七冊は、初期の油印（ガリ版）を含め、今回全冊を直に確認した。

また、岡村教授主宰の文藝座談会、『中国文学論集』については、自分の学部院生時代や徳島大赴任時にあいまいな部分が残るが、当事者としてほぼ確実な記憶がある。但し、能力に限界がある筆者のそれは客観的なものではなく、あくまで主観的な印象に過ぎないことを予めお断りしておきたい。『中国文学論集』も全冊を閲覧した。

三　目加田誠主宰「九大中国文学研究会」「中国文芸座談会」『中国文芸座談会ノート』時代（?―一九六八）

手許に『中國文藝座談會ノート』全十七冊、合一冊がある。製本時に周辺を少し裁断したが、原型は洒落た稀少判型のB二十判（ヨコ一八二ミリ×タテ二〇六ミリ、厚さ五三ミリ）に、一―九号は油印（ガリ版）、十―十七号はタイプ版印刷。今では稀覯本である。編集者は一貫して「九大中国文学研究会」である。創刊号に載る目加田誠の「創刊に

よせて」から、関連箇所を以下に抜粋する（表記を一部改めた。國藝會は時に常用字。『目加田誠著作集』不載）。

吾々の中国文芸座談会は昭和二十六年五月以来、已に二十三回を重ねてゐる。この会に於けるその都度の研究発表なり討論なり、もしくは平素各自の、或は共同の研究の成果を記録して、雑誌を刊行しようという計画はかねて立てられてゐたのだが、今回ようやくその実現を見ることになった。（略）文学といふものを私は非常に幅広く考へ度い。たゞ中国文学の与へるものは、我々にとって正しく今日の問題であり、我々を自棄絶望から救ふ力づけであり、先づ吾々自身を改造させる何者かゞそこにあるともいえる。その役割を中国文学は文学として今日の我々に果してくれるのである。始めこの座談会を創始した当時の諸君は多く已に就職して実社会にある。その諸君も忙しい業務の間にたえずこの座談会と聯絡をとって勉強をつづけている。月々の座談会には九大を中心に、学芸大学、西南学院大学、福岡女子大学、北九州大学の諸君、及びその他の人々が集って、美しいグループが形成されてゆく。この座談会は、今後中心の個人は次第に代り合っても、会は益々盛になってゆくであらう。だが順調にゆくとは限らない。それに今日尚、内容に於ても方法に於ても、未熟であることは認めねばならない。たゞ中国文学の研究を通して、何か現代に生きるものの一人として、夫れぞれ身に及ぶささやかな貢献がしたい。さういう自分に自分をなしたいと願っているのみだ。（後略）

ここに目加田が述べる「中国文学」は「現代中国文学」の謂いであることは、この序文が書かれた昭和二十九年（一九五四）が一九四九年の新中国建国僅か五年後であること、当時の中国文学研究室の主要構成員が中国引き揚げ者であったことと深く関わるであろう。この序文から、中国文芸座談会が昭和二十六年（一九五一）五月に開始されたこと、昭和二十九年（一九五四）九月刊行の『中国文芸座談会ノート』第一号（編集兼発行者は九大中国文学研究会）時に、既に二十三回の中国文芸座談会開催の事前実績を有していたことが分かる。

第一号には、彙報としてそれまでの中国文芸座談会二十三回分の口頭発表題目を載せる。それを一覧すると、全五十七題中、実に五十四題、九十五％が中国近現代文学関係（うち漢字一題）であり、僅か三題五％が中国古典文学関係である。論文発表は、『中国文芸座談会ノート』全十七冊、六十七篇の論文その他のうち、約三分の二の四十五篇、六十七％が中国近現代文学関係、約三分の一の二十篇、三十％が中国古典文学関係である。してみると、目

加田誠主宰の中国文芸座談会、また機関誌『中国文芸座談会ノート』に現実の影響を与えたのは、お隣の建国間もない中華人民共和国の現代文学であった。筆者が関係者から聞いたところでは、その名称もあの毛沢東の「延安文芸座談会における講話」（一九四二年）に拠るとのことである。さても、九大の中国文学研究は隣国中国の大きな影響を受けて出発したが、やがて文化大革命（一九六五－七六年）を経て、日本での中国文学研究のあり方も大きな転換期を迎える。九大の場合、それは第二代主任教授岡村繁が主宰する中国文藝座談会、及び『中国文学論集』において具体化する。

四　岡村繁主宰「中国文藝座談会」『中国文学論集』時代（一九六八－八五）

岡村繁は一九六六年、中国文学講座助教授に赴任し、翌年目加田が定年退職、一九六八年、教授に昇任する。以後一九八六年に退職するまで二十年間、岡村は全国や全学の関連要職を歴任する一方、中国文藝座談会や『中国文学論集』の発展に心血を注ぎ、今日の九大中文の隆盛に貢献した。目加田は『中国文学論集』創刊号「『中国文学論集』の発刊によせて」に、この間の事情を次のように回顧する。（龍渓書舎『目加田誠著作集』等に未載録。）

そのうちに、これから月に一度、日をきめて座談を持とう、九大研究室のみならず、他の大学の人々をも誘って一緒にやろう、ということになり、「中国文芸座談会」と称して、教官学生一緒に研究発表と懇談の集まりを始めた。その第一回は、昭和二十六年五月のことであった。それがかなりつづいた後、今度はさらに、各人が読み、考えたことを書いて、雑誌を発行しようではないか、ということになり、これを「中国文芸座談会ノート」と名づけ、昭和二十九年九月、第一号をガリ版で創刊し、第十号以後はプリント印刷にかえた。

この当時の諸君の情熱を、私はいまも生涯のよい思い出としている。しかし、それを何年かつづけているうちに、研究室の空気もいくらか変り、思想的にも混乱があり、学生諸君の気風もさまざまになって、ノートの刊行も次第に間遠くなり、始めの頃は、皆、書きたくて進んで順番に書いたものが、後には原稿を催促してもなかなか集まらぬようになった。各自がほんとうに訴えたい心があってこそこの雑誌は意味があり、それを義務として重荷に感ずるようになっては意味がない。また学術論文なら「九州中国学会報」や、「日本中国学会

報」もあることだ。始めの精神が薄れてきては、もはや無理して続けることもあるまい。と思って、一旦「中国文芸座談会ノート」は停刊した（中略）。この時私は九大を去り、あとに気鋭俊秀の岡村教授が中国文学科の主任となられ、研究室の空気も一新してひきしまった。岡村教授の指導のもとに、今や九大中国文学は新しく発足しはじめた。ここで研究室諸君・卒業生諸君の間に、旧「中国文芸座談会ノート」を発展的に解消して、今度新しく「中国文学論集」を発刊されるという嬉しいことを知ったのである。（後略）　一九七〇・三・一五

『中国文芸座談会ノート』十七冊の次号刊行までの期間を見てみると、一－十号は二－三ヶ月、長くても六ヶ月以内に次号を発刊しているが、十一－十七号では次号の発刊まで十五－二十二ヶ月という一年以上の期間を要している。目加田が指摘する「ノートの刊行も次第に間遠くなった」原因は不明である。目加田がここに回想する中文研究室の空気の変化、思想的な混乱、学生の様々な気風等について、当事者でない筆者には具体内容が分からないが、或いはこれら全てが複合したものかも知れない。創刊号から十号まで約三年、数人に限定されていたであろう寄稿者の投稿はそろそろ在庫一掃してしまい、次の投稿まで今しばらく時間を要したかという推測も成り立つであろう。目加田は昭和四十二年（一九六七）、九大を定年退職して、その頃博士課程を新設した早稲田大学大学院へ主任教授として転出し、九大中国文学会の機関誌問題は新任の岡村繁の手腕に委ねられる。

一九六六年に中国文学講座助教授として赴任し、翌翌年に主任教授に昇任した岡村繁は、「旧『中国文芸座談会ノート』を発展的に解消して」（目加田『中国文学論集』の発刊によせて）、『中国文学論集』を創刊する一方、中国文藝座談会の名称はそのまま継承した。無論、時代と人物が代われば、内容も変化するが、在学生と卒業生が定期的に集まり、中国文学研究の共通課題について自由に語り合うというコンセプトは不変であった。一九七一年に中文へ進学した筆者は、この頃から中国文藝座談会の一員となるが、広い会議室の長机のそこかしこにお菓子とお茶が配られた風景に驚いた記憶がある。貧乏学生は、学内でお茶やお菓子の接待を受けたことは曽て一度も無かった。後日、懇談の折に、『文芸座談会ノート』を停刊して新たに『中国文学論集』を創刊した理由を尋ねた筆者に、岡村先生は言下に「それは君たち若い者の就職のためです。『ノート』ではインパクトが無い。」と即答された。引用した目加田序文にもあるが、当時は日本中国学会の創立（一九四九年）や『日本中国学会報』の創刊（一九四九年）、ま

た九州中国学会の創立（一九五三年）や『九州中国学会報』の創刊（一九五五年）等が相次いだ頃であり、第二次大戦後の新体制の大学において、新しい学問を確立するべく全国に続々と学会・学会報が組織されつつあった。以下は関係者の伝言でなく、公的証言として記録を残したいが、『中国文学論集』の文字スタイルや表紙デザインは、全て岡村先生が自ら白紙に線引きをして創出したオリジナルである。また、第八－十八号（一九七九－八九）の十一冊のスタイルが異なるのは、経費と舊活字の事情から台湾の印刷所に依頼した故である。岡村教授の『中国文学論集』の創刊（一九七〇年）は、この戦後体制下での新しい学問の気運勃興に完全に合致し、九州大学の中国文学研究の水準を全国レベルに引き揚げようとする先生の悲願が込められた必死の事業であった。

なお、一方の研究会「中国文藝座談会」については、岡村主宰のそれが中国古典文学の発表が多くなったにも関わらず、毛沢東の「延安文芸座談会での講話」に因む目加田教授以来の名称を変更することなくそのまま継承している。従って、その乖離を怪訝に思う会員も中には確かにいる。その理由は推測するしかないが、一会員として理由を勝手に忖度すると、当時新参の岡村先生からすれば、目加田老大先生以来の伝統を可能な限り継承しつつ、新旧交代の摩擦の軽減を図ったのではないか。付言すれば、その後今日まで続く名称においては、誰言うことなく、「文芸」⇒「文藝」の字を用い、「中国文藝座談会」を正式名称としている。

会の常態について贅言すれば、前「二百回を超えた中国文藝座談会」と重複するが、日程は原則二月に一度、土曜一時半－五時。発表者は三名前後。卒論構想発表等で多人数の場合は一人持ち時間三十分制限の場合もあるが、通常は発表四十分、質疑四十分程度あり、特に質疑時間は十分に確保する。参加者は中文の現教員、学生院生、卒業生、新聴講生等を含む四十名程度。発表者原稿は事前に研究室内で練られた後に、この座談会で更に広範に指導を受け、各人の事情によっては更に学会大会での本発表に臨むことになる。近年、九大関係者の研究発表が良く練られていて精彩があるとの有り難い好評をいただくことがあるが、通常の大学での発表準備に加えて、更に精魂込めた準備を心掛けていることと深く関係するであろう。発表者は、他に国内外の有名大学の著名研究者に発表を依頼することもある。

筆者は二十歳から六十七歳の今日まで、途中の四国赴任六年間を除き、ほぼ全ての文藝座談会を拝聴した。耳学

問という言葉があるが、凡才故に理解困難な分野が残るとはいえ、主に中国古典文学のあらましを俯瞰できるようになった（錯覚かも知れないが）のは、七割はこの文藝座談会で共に学んだお陰である。もしこの機会が無かったとしたら、筆者の知識は今以上に薄っぺらなままで終始したであろう。その意味で、あくまで一介の研究者でありたい筆者は、「中国文藝座談会」『中国文学論集』に対して、自分の母体として心底からの深い愛情と尊崇を覚えるものである。

五　竹村則行教授・静永健准教授主宰「中国文藝座談会」『中国文学論集』時代（一九九七―二〇一四年）

ここでは、運営の実態を反映して、表記のように括ることにする。凡庸な筆者とそれを補佐する俊英「主任」准教授の組合せである。「中国文藝座談会」と『中国文学論集』の積み上げについては、基本的に岡村教授の方針を踏襲する。両研究活動を静永教授が献身的に支える。氏が近十年の中文就職好況の功労者であることに間違いはない。

六　静永健教授主宰「中国文藝座談会」『中国文学論集』時代（二〇一五年―現在）

ここも、基本的には前五章に同じ。歴史の流れの中で変動しつつあることとして、前五章時代の主要構成員であった院生の多くが幸いに就職の道を自ら開拓して中文研究室を去り、代わりに中国本土から複数の俊英留学生が研究室の構成員となって、新しい活気を齎していること、二〇一八年十月からの伊都キャンパス完全移転を目前に、多くの構成員が大きな期待と一抹の不安に胸一杯であること。この時期を迎えての「中国文藝座談会」『中国文学論集』のあり方、言い換えれば九大中文の近未来のあり得る姿については、次章のまとめにおいて検討したい。

七　旧貝塚キャンパスにおける九大中文での学究生活の総括

ここで、二〇一八年九月に移転して、今は過去となった旧貝塚キャンパスにおける九大中文（九州大学中国文学講座）での学究生活について、記憶の新しいうちに総括しておくことは意義深い。（九大中文は、当初支那文学講座として

法文学部本館内に設置され（今の箱崎三丁目）、その後昭和三十九年（一九六四）に貝塚地区の法文系キャンパス（今の箱崎六丁目）に学内移転した。今を去る五十四年前である。慣例として、前者を箱崎地区、後者を貝塚地区として呼ぶ場合が多い。本稿は、筆者が大学生活を送った後者を対象とし、以下「貝塚」と略称する。）制度等は全国的、全学的のものもあり、必ずしも九大中文独自ではないが、新伊都キャンパスにおいて、貝塚キャンパスでの長所が継承され、かつ無用の短所が是正されることを祈り、備忘録を兼ねて、以下に列記する。

（一）学習・研究時間の保証

筆者の学生院生時代は研究室の使用制限は夜十時であり、時間になると守衛のおじさんからかなり厳格な口調で即時退室を促された。近年はそうでもないと聞く。実は文学部人にとって、九時以前、十七時以後の研究室での時間の使い方は重要である。演習の準備やとりとめない交談を含め、本人が大学で学び得る種々の知識情報を研究室での会話を通じて先輩や友人から得ることができるからだ。研究発表や卒論修論発表が近づくと、研究室全体が俄かに緊張してくる。単独でしっかり論文を纏めるものもいるが、相当数が先輩や同輩等と賑わいながらお祭りよろしく集団制作する。例年一月十日十七時の論文提出締切は厳格である。某大学では通常時の十七時退室が決まりだという。これ以後学内は幽霊屋敷化する。管理上の安全問題や交通上の問題はあろうが、伊都キャンパスにおいても、学生の九時－十七時前後の研究室や図書館施設の使用について配慮と善処をお願いしたい。大学人にとって必要な自由な時間は実は九時前、乃至十七時以降にあるからだ。著名文化賞に繋がる自由な研究時間は全地球的に実に十七時以降にある。

（二）図書の閲覧体制の利点

文学部（院）全二十二講座が研究室を持ち、中央図書館とは別に、廊下を隔てて文系書庫を有した従来の体制は、先人の苦労が偲ばれるが、使用活用面からみて理想的であった。筆者も演習中に何回か関連図書を借り出したし、特に近隣の中哲や東洋史図書はもとより、三階の国文、国史、美学図書からは随分学益を得た。新中央図書館は独自の管理体制を有するであろうが、使用者が書庫内を渉猟して目指す図書を借り出す今の「活用」体制の長所もぜひ評価して可能な限り継承して欲しい。現場にあった者から言えば、今日までの図書の閲覧体制と、現今の中文卒

業生特に院生の就職の好況とは強い因果関係がある。逆に言えば、もし図書や研究室の使用が大幅に制限される場合、九大首脳が求める就職の好転や文化賞の受賞等も自らその機会を狭めることになる。管理強化が自らの首を絞めてはいけない。

（三）喫茶・談話空間の保証

文学部全二十二の学科毎に研究室を有するのは、学生の交流の面から理想的である。そこでは少人数の演習や講義が行われるほかに、雑談、相談、演習準備等が間断なく実施され、お昼の弁当談義も展開される。伊都キャンパスは近くに学生街が未整備のため、これらの癒し空間の配慮が一層重要である。

八　まとめ　伊都キャンパスに一新集合する「中国文藝座談会」『中国文学論集』

文学部・人文科学研究院を含む九大貝塚地区の諸部局は、ほぼ当初の大学移転計画通り、二〇一八年十月から伊都地区に完全移転する。新キャンパスではほぼ現状の規模が保証されると聞く。個人の住居移転の場合でも、新生活は希望と不安が綯い交ぜになるものだが、大学研究室の移転は規模が大きいだけに、それに伴う不安と不便等を早めに把握し、的確に対処することが望ましい。

以下には、凡庸ながら旧キャンパスに馴染んだ「中国文藝座談会」『中国文学論集』の前任代表者として、新静永代表への伝言（遺言）を箇条書きに述べる。受け入れ可能であれば是非実施を検討してほしい。

（一）「中国文藝座談会」『中国文学論集』は、我々九大中文が全国・世界に飛翔する双発のエンジンである。貝塚時のまま、或いは必要な若干の修整を加えても、この貴重な文化遺産は性能を堅持して継承したい。

（二）この機会に会の名称や組織を大幅に変更改編することも、（一）の保証の為ならば容認するつもりであるが、その際は構成員の同意を求めて慎重な手続を求む。加えて、名称の変更は長く続いた目加田・岡村伝統との決絶を意味し、回数・号数もカウントを停止することになる。

（三）移転後五－十年は福岡市東区在住の構成員がなお多数を占めており、西区への移動において、時間・交通費等でのマイナス感が案じられる。西新プラザ、九大博多駅オフィス、千早なみきスクエア（東区施設）、近

隣の大学施設等の使用を検討しては如何か。これらは有料であっても、伊都キャンパス使用での参加者の交通費を考慮すれば、ある程度相殺できないか。施設使用料（一回数千円）の捻出が困難であれば、別途に方策を考えたい。

（四）　移転後には、長年の懸案であった人文・比文・言文の関係機関の近隣集合が物理的に実現する。急ぐ必要はないが、そのメリットを活かして、五十―百年後の九大中文の更なる学術浮揚を促す基盤形成を切に願う。

九　五十―百年後の九大中文の展望

筆者は二〇一八年九月二十一日、新装なった伊都キャンパスの中文研究室を初めて訪問した。人文研究院開学記念の国際シンポ「アジアにおける人の移動と人文学的変容」（本誌彙報参照）への参加の折に、空き時間を利用して訪問したのである。時間の関係で新中央図書館参観は後日に回した。今回の中文新研究室訪問は、シンポ招待の杜曉勤北京大教授（二〇一二年度九大中文外人教師）一行数名を含めて賑やかなものとなった。実は訪問前に筆者の脳裏には幾らか不安があった。地震津波等の自然災害への対処、福岡市内からの距離感、新研究室の馴染み度、新研究室を六階に含むイーストゾーン一号館や隣接する新中央図書館を含めて使い勝手の如何、等である。最初の訪問では一部しか分からず、確かな評価には時間が必要だが、結果から言えば、図書館の使い勝手は後日評価するとして、幸いに第一回の訪問で事前の杞憂の多くが霧消した。まず、相当の高台にある中央図書館の後背に鎮座するイーストゾーン一号館の六階となれば、海抜五十㍍は超えようか。これなら地震時に住民の避難所になっても津波に襲われる心配はない。読者は怪訝に思うであろうが、これが二〇〇五年三月二十日、貝塚キャンパス二階の竹村研究室（中文研は一階）で福岡県西方沖地震に遭遇した筆者のトラウマである。伊都の新中文研究室は二室あり、一方の演習室には貝塚時と同じく目加田・岡村両先生の遺影が飾られ、書架や机椅子の多くが貝塚からの継続使用であった。研究室は全体として貝塚時よりも少し広く感じた。また東方遠処に海が臨める立地もすばらしかった。室内には貝塚時と同じく数名の構成員が作業をしており、彼らが自分の作業を止めて、闖入客にいそいそとお茶を出してくれたのも嬉しかった。初次訪問の気は全くしなかった。これならば、市内から距離はあっても、図書館の

利用評価はともかく、しっかりやれば、貝塚時に相当する、あるいはそれを超える研究成果を挙げるのも可能ではないか、ともかくの第一印象であった。

後日新図書館を使用したが、規模・設置等、問題なくすばらしかった。今後しっかり使用すれば、全国、アジアはもとより、世界でも有数の大学図書館としての名声を得ることも可能である印象を持った。内外に誇るに足る図書館である。

建物は入居者がいてこそ機能的に美しく輝く。中文を含むイーストゾーン一号館は文学部の各研究室が入居しているが、その全体像は壮観であった。中央図書館の公称三百五十万冊の図書資料が更に控える。これまでは何となく不安が先行しがちな移転計画であったが、これほどの斬新な設備が実現した今、次の五十年（貝塚文学部は一九六四年以来五十四年間）、また百年（一九二七年の支那文学講座設置以来九十一年）を目指して、在職退職、老若男女を問わず、関心のある関係者が一致協力して確実に努力を重ねる必要を強く感じた次第である。

文藝座談会五百回、『中国文学論集』百号の金字塔も決して遠い夢ではない、次の現実目標である。

参考：竹村則行「二百回を通過した中国文芸座談会」（「日本中国学会便り」二〇〇二年第二号、日本中国学会）。
電子版『九州大学百年史』第四巻、部局史編Ⅰ、文学部、中国文学の項（電子版につき、この順に検索）。
同内容の紙媒体物に『九州大学文学部九十年の歩み』（九州大学文学部、二〇一四年）九十六頁がある。